国立東京療養所にて
ペテロとコルネリオ
――使徒行伝第10章――

（『愛泉』誌第21号、１９５８年10月12日発行）

１９５８年４月
小池辰雄

常に神に祈れり　立て、我も人なり　万民の主イエス　贖罪の十字架　復活　聖霊降り給う

【使徒行伝10】

1 ここにカイザリヤにコルネリオという人あり、イタリヤ隊と称うる軍隊
の百卒長なるが、2 敬虔にして全家族とともに神を畏れ、かつ民に多くの
施済をなし、常に神に祈れり。3 或日の午後三時ごろ幻影のうちに神の使き
たりて『コルネリオよ』と言うを明かに見たれば、4 之に目をそそぎ怖れて
言う『主よ、何事ぞ』御使いう『なんじの祈と施済とは、神の前に上りて記
念とせらる。5 今ヨッパに人を遣してペテロと称うるシモンを招け、6 彼は
皮工シモンの家に宿る。その家は海辺にあり』7 斯く語れる御使の去りし後、
コルネリオ己が僕二人と従卒中の敬虔なる者一人とを呼び、8 凡ての事を告
げてヨッパに遣せり。

9 明くる日かれらなお途中にあり、既に町に近づかんとする頃おい、ペテ
ロ祈らんとて屋の上に登る、時は昼の十二時ごろなりき。10 飢えて物欲しく
なり、人の食を調うるほどに我を忘れし心地して、11 天開け、器のくだるを
見る、大なる布のごとき物にして、四隅もて地に縋りくだされたり。12 その
中には諸種の四足のもの、地を匍うもの、空の鳥あり。13 また声ありて言う『ペ
テロ、立ちて、屠りて食せよ』14 ペテロ言う『主よ、可からじ、我いまだ潔
からぬもの穢れたる物を食せし事なし』15 声再びありて言う『神の潔め給い
し物を、なんじ潔からずとすな』16 かくの如きこと三度にして、器は直ちに
天に上げられたり。

17 ペテロその見し幻影の何の意なるか、心に惑うほどに、視よ、コルネリ
オより遣されたる人、シモンの家を尋ねて門の前に立ち、18 訪いて、ペテロ
と称うるシモンの此処に宿るかを問う。19 ペテロなお幻影に就きて打案じい
たるに、御霊いい給う『視よ、三人なんじを尋ぬ。20 起ちて下り疑わずして
共に往け、彼らを遣したるは我なり』21 ペテロ下りて、かの人たちに言う『視

よ、我は汝らの尋ぬる者なり、何の故ありて来るか』22かれら言う『義人にして神を畏れ、ユダヤの国人の中に令聞ある百卒長コルネリオ、聖なる御使より、汝を家に招きて、その語ることを聴けとの告を受けたり』23ここにペテロ彼らを迎え入れて宿らす。

明くる日たちて彼らと共に出でゆきしが、ヨッパの兄弟も数人ともに往けり。24明くる日カイザリヤに入りし時、コルネリオは親族および親しき朋友を呼び集めて彼らを待ちいたり。25ペテロ入り来れば、コルネリオ之を迎え、その足下に伏して拝す。26ペテロ彼を起こして言う『立て、我も人なり』27かくて相語りつつ内に入り、多くの人の集まれるを見て、ペテロ之に言う、28『なんじらの知る如く、ユダヤ人たる者の外の国人と交りまた近づくことは、律法に適わぬ所なり、然れど神は、何人をも穢れたるもの潔からぬ者と言うまじきことを我に示したまえり。29この故に、われ招かるるや躊躇わずして来れり。然れば問う、汝らは何の故に我をまねきしか』30コルネリオ言う『われ四日前に我が家にて午後三時の祈をなし、此の時刻に至りしに、視よ、輝く衣を著たる人、わが前に立ちて、31「コルネリオよ、汝の祈は聴かれ、なんじの施済は神の前に憶えられたり。32人をヨッパに送りてペテロと称うるシモンを招け、かれは海辺なる皮工シモンの家に宿るなり」と云えり。33われ速かに人を汝に遣したるに、汝の来れるは忝けなし。いま我等はみな、主の汝に命じ給いし凡てのことを聴かんとて、神の前に在り』34ペテロ口を開きて言う、『われ今まことに知る、神は偏ることをせず、35何れの国の人にても神を敬いて義をおこなう者を容れ給うことを。36神はイエス・キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言をおくり給えり。37即ちヨハネの伝えしバプテスマの後、ガリラヤより始まり、ユダヤ全国に弘りし言なるは汝らの知る所なり。38これは神が聖霊と能力とを注ぎ給いしナザレのイエスの事にして、彼は徧くめぐりて善き事をおこない、凡て悪魔に制せらるる者を医せり、神これと偕に在したればなり。39我等はユダヤの地およびエルサレムにて、イエスの行い給いし諸般のことの証人なり、人々は彼を木にかけて殺せり。40神は之を三日めに甦えらせ、かつ明かに現したまえり。41然れど凡ての民にはあらで、神の預じめ選び給える証人、即ちイエスの死人の中より甦え給いし後、これと共に飲食せし我らに現し給いしなり。42イエスは己の生ける者と死にたる者との審判主に、神より定められしを証することと、民どもに宣べ伝うる事とを我らに命じ給う。43彼につきては預言者たちも皆、おおよそ彼を信ずる者の、その名によりて罪の赦を得べきことを証す』

44ペテロ尚(なお)これらの言を語りおる間に、聖霊、御言をきく凡ての者に降(くだ)りたもう。45ペテロと共に来りし割礼(かつれい)ある信者は、異邦人にも聖霊の賜物(たまもの)のそそがれしに驚けり。46そは彼らが異言(いげん)をかたり、神を崇(あが)むるを聞きたるに因る。47ここにペテロ答えて言う『この人々われらの如く聖霊をうけたれば、誰か水を禁じて其のバプテスマを受くることを拒み得んや』48遂にイエス・キリストの御名(みな)によりてバプテスマを授けられんことを命じたり。ここに彼らペテロに数日とどまらんことを請(こ)えり。

●常に神に祈れり

1ここにカイザリヤにコルネリオという人あり、イタリヤ隊と称(とな)うる軍隊の百卒長(ひゃくそつちょう)なるが、2敬虔にして全家族とともに神を畏(おそ)れ、かつ民に多くの施済(ほどこし)をなし、常に神に祈れり。

「常に神に祈れり」と特に書いてあるところが非常に大事です。今のクリスチャンに一番欠けているのは、常に神に祈るクリスチャンが少ないということです。プロテスタントが何故、無力であるか。これは常に神に祈るクリスチャンでなく、常に神学書を読んだり、常に聖書研究をやったりしている。そういったことで祈りのない者はクリスチャンでない。どんなに聖書知識があっても、神学の勉強をしましても、どれほど毎日聖書を読んでいましても、祈りがなかったら、一番大事な要素が欠けている。結局、今のプロテスタントで最大の欠陥は

「祈りの不足」

ということです。イエス・キリストは何よりも祈りの人でした。

「常に祈る」

ということにおいて、キリストの右に出づるものはない。常に神のふところに、

「我と父とは一つなり」

という実存の中におられた。しかし、決してそれは神の子だから楽々として一つというのではなくて、彼は祈りを常にしておられた。淋(さみ)しい所に行くなどというのは、これみな祈りのための他の何ものでもない。

ここ清瀬は寂しき処が多いので、もしも皆さんが清瀬に居て祈りを怠っていたら、最大の特権を自ら放棄するわけです。どうか皆さん、この恵まれた環境は特権、これは祈りの使命を帯びている。どうか祈りを深めていただきたい。神を呼吸する。神を呼吸していたのはキリストですが、我々はこのキリストを呼吸する人になる。空気を無意識に呼吸していますが、どうか

「常にキリストを呼吸する」

という祈りの人になってほしい。それが即ち、

「**常に祈り、御霊を消すな**」というわけです。この

「**常に神に祈れり**」

という短い言葉をしっかりつかまえていかなければいけない。

「はぁ、百卒長はそうでしたか」

ではいかん。

この聖書はこちら側から読んでいてはダメです。聖書の中に入ってその現実の中に深く身を入れて、

「**常に神に祈れり**」

という文句にぶつかったならば、もうその中に自分を入れなくてはいかんわけです。

「聖書というドラマの中に、この劇の中に自分の身を投ずる」

こと。聖書は、教えではないのですから、研究する本でもなければ、教えをただ教えとして読むべき本でもない。事実が啓示されている本ですから、この事実の中に自分を体当たりしてゆく。その中の一人になる。その他にない。だから、読むことが驚くべき行為です。私たちは読むということにおいて驚くべき行為的な読み方をしなければ読めない。

3 **或日の午後三時ごろ幻影（まぼろし）のうちに神の使（つかい）きたりて『コルネリオよ』と言うを明かに見たれば、4 之に目をそそぎ怖（おそ）れて言う『主よ、何事ぞ』御使（みつかい）いう『なんじの祈と施済とは、神の前に上りて記念とせらる。5 今ヨッパに人を遣してペテロと称うるシモンを招け、6 彼は皮工（かわなめし）シモンの家に宿る。その家は海辺にあり』7 斯く語れる御使の去りし後、コルネリオ己が僕二人と従卒中の敬虔なる者一人とを呼び、8 凡（すべ）ての事を告げてヨッパに遣（つかわ）せり。**

このコルネリオという人は常に祈っている人ですから、ある時に神さまの方から幻をもって、しめし（啓示）を与え給う。

「**神の使（つかい）きたりて『コルネリオよ』と言う**」

と。よろしいですね、祈りの世界でそういう御声を聞けたら。いわゆる祈り三昧といって三昧的な祈りではない。祈りの世界は神の生命をいただく世界ですから、この生命は溢れなくてはいかん。それがコルネリオにおいては施しにおいて現われているわけです。

●立て、我も人なり

9 **明くる日かれらなお途中にあり、既に町に近づかんとする頃おい、ペテロ祈らんとて屋の上に登る、時は昼の十二時ごろなりき。10 飢えて物欲しくなり、人の食を調（ととの）うるほどに我を忘れし心地して、11 天開け、器のくだるを見る、大なる布のごとき物にして、四隅（よすみ）もて地に縋（つ）りくだされたり。12 その中には諸種（もろもろ）の四足（よつあし）のもの、地を匍（は）うもの、空の鳥あり。13 また声ありて言う『ペ**

テロ、立て、屠りて食せよ』14ペテロ言う『主よ、可からじ、我いまだ潔からぬもの穢れたる物を食せし事なし』15声再びありて言う『神の潔め給いし物を、なんじ潔からずとすな』16かくの如きこと三度にして、器は直ちに天に上げられたり。

ペテロは忘我の状態、深い祈りの中に入って、天開け、器のくだってくるのを見た。書かれてあるように、思いがけなかった幻に出っくわした。しかし、これがとにかく

「食前の祈りにおいて」

とありますから、食事のことがそこに示されたということは非常な意味があったわけです。潔からぬもの、穢れたる物のことは、旧約聖書レビ記の11章に詳しく書いてあります。

17ペテロその見し幻影の何の意なるか、心に惑うほどに、視よ、コルネリオより遣されたる人、シモンの家を尋ねて門の前に立ち、18訪いて、ペテロと称うるシモンの此処に宿るかを問う。19ペテロなお幻影に就きて打案じいたるに、御霊いい給う『視よ、三人なんじを尋ぬ。20起ちて下り疑わずして共に往け、彼らを遣したるは我なり』21ペテロ下りて、かの人たちに言う『視よ、我は汝らの尋ぬる者なり、何の故ありて来るか』22かれら言う『義人にして神を畏れ、ユダヤの国人の中に令聞ある百卒長コルネリオ、聖なる御使より、汝を家に招きて、その語ることを聴けとの告を受けたり』23ここにペテロ彼らを迎え入れて宿らす。

明くる日たちて彼らと共に出でゆきしが、ヨッパの兄弟も数人ともに往けり。24明くる日カイザリヤに入りし時、コルネリオは親族および親しき朋友を呼び集めて彼らを待ちいたり。25ペテロ入り来れば、コルネリオ之を迎え、その足下に伏して拝す。26ペテロ彼を起こして言う『立て、我も人なり』

マタイ伝8章の百卒長がキリストに出っくわした時には、これは相手は主ですから、

「私は屋根の下にも入れまつることができません」

と言って、正に平伏した言葉を、事実その心をもって語りました。ところがこの時の相手は主キリストではなくてペテロでした。しかしながら、ペテロでも神のお示しによってこのような人を迎えたというので神の使者、使徒、預言者のようなペテロですから、足下に伏して拝するのも当然な気持であったわけです。

26ペテロ彼を起こして言う『立て、我も人なり』27かくて相語りつつ内に入り、多くの人の集まれるを見て、ペテロ之に言う、

使徒行伝のペテロは実に素晴らしい。3章においてもペテロを通して、生まれつきの跛者が癒された時に、

「12ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つ

むるか。13アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光あらしめ給えり。』（使徒行伝3・12～13）

ペテロは自分の信仰も、霊的な賜物も、何ものとも思っていない。それを決して彼は私しない。この場合も、ペテロは

「私もあなたたちと同じただの人である」

と言った。あとで学ぶところですが、14章のパウロとバルナバがやはり同じように答えて

「14使徒たち、即ちバルナバとパウロと之を聞きて、己が衣をさき群衆のなかに馳せ入り、15呼わりて言う『人々よ、なんぞ斯かる事をなすか、我らも汝らと同じ情を有てる人なり、汝らに福音を宣べて斯かる虚しき者より離れ、天と地と海とその中にある有らゆる物とを造り給いし活ける神に帰らしめんとするなり。』（使徒行伝14・14～15）

どこまでも神を指し、キリストを指している。そういうわけで、今の普通のキリスト教におけるように、何も現象しないのではない。驚くべき事が使徒行伝には現象している。しかしそれは神の業、キリストの御霊の能力、キリストの愛がそこにこぼれ、溢れているのですが、それを使徒たちはただ器となり、手となり、足となり、キリストの僕となって働いているだけです。為すべきをただしているだけ。いや、実に役に立たない何ものでもないとういう、彼らの砕けたる無私の心、ここに使徒たちの本当の姿があります。この姿を見損なって、

「ああ、使徒たちは素晴らしい」

といって、パウロ、ペテロ、ヨハネというものをもし素晴らしいと思ったら、それはとんでもない間違いです。私たちにとって素晴らしいものは、主イエス・キリストの他にないのです。このことははっきりと皆さんの胸に置いてくれないと困る。

無私の心、キリストの前に本当に平伏す砕けの魂、ここには神さまは限りなく聖旨を現じ給う。「私」というつっかい棒があったり、濁りがあると、光はそのために屈折してしまう。けれども、濁りのないところに置かれると、光も力も命も、これを貫いて働いてくださる。信仰とは正に己を何ものともせず、キリストを一切とすることでありまして、それを事実、正直、本当にそうすることであって、これは「謙遜」とかいうことではない。人間的なひとつの徳目としての謙遜なんてことでは、そんな世界にはとても入れない。謙遜ではなく、私がどうしても言わなくてはならないものは、「砕け」なのです。本当に砕けのところに入る。そうでなかったら、いわゆる御利益宗教の教祖的なものになって、これはたとい力が働きましても、福音とは質が違う。このことははっきりしていただきたいと思います。

●万民の主イエス

それでペテロが、

27 **かくて相語りつつ内に入り、多くの人の集まれるを見て、ペテロ之に言う、**
28 **『なんじらの知る如く、ユダヤ人たる者の外の国人と交りまた近づくことは、律法に適わぬ所なり、然れど神は、何人をも穢れたるもの潔からぬ者と言うまじきことを我に示したまえり。**

ここではっきり、旧約の限界から新約の世界へ突き抜けた。このペテロの答えは極めて重大な答えです。ユダヤ人は選民、分かたれたる者である。旧約の世界において非常に厳格なものはこの区別です。外の者とは区別された「選びの民」であるということを誇りとして、外の者は穢れたとする。

「選びの民にだけ救いが来る」

という角度が非常に強い。それはところが、非常な行き詰まりにきた。それがパリサイ的な信仰についに来てしまったので、預言者はそれを突き抜けていました。けれども、まだ旧約にはその限界がありました。イザヤ書といえどもまだ残滓は残っています。この限界が今突き抜けられた。ペテロが、

「然れど神は、何人をも穢れたるもの潔からぬ者と言うまじきことを我に示したまえり」

と。どうしてそういうふうに示されたかは、もう少し先に行ってからお話します。この幻においてとにかく三度声があって、

「神の潔め給いしものを汝潔からずとなすな」

という聖言がペテロの中に深くきまして、それを考えめぐらし、また深く祈っているうちにある示しが来た。それがこの言に表れている。

「然れど神は、何人をも穢れたるもの潔からぬ者と言うまじきことを我に示したまえり」

とは、もはや食物の問題ではない。レビ記の19章に、

「1エホバまたモーセに告げて言いたまわく、2汝イスラエルの子孫の全会衆に告げてこれに言え、汝等宜く聖くあるべし。其は我エホバ汝らの神聖くあればなり」（レビ19・1～2）

と。「聖」ということは「別つ」ことです。だから、

「汝らは神の側に別たれものとしてそれらしくあれ」

と仰せられる。またレビ記22章30～32節の中にも、

「我は汝らを贖い出したもの、解放して聖別したもの」

といって、

「……我はエホバなり、……我はエホバなり、……我はエホバなり」

と選びの事実を非常に深く示しておられる。このことはたくさん出ています。ところが、

「神は、何人をも穢れたるもの潔からぬ者と言うまじきことを我に示したまえ

と。明らかにすべての人が区別のない事態の中に入れられた。その理由を今ここでペテロは直々に説明せずに、もう少しあとでしています。

り」

29この故に、われ招かるるや躊躇わずして来れり。然れば問う、汝らは何の故に我をまねきしか』30コルネリオ言う『われ四日前に我が家にて午後三時の祈をなし、此の時刻に至りしに、視よ、輝く衣を著たる人、わが前に立ちて、31「コルネリオよ、汝の祈は聴かれ、なんじの施済は神の前に憶えられたり。32人をヨッパに送りてペテロと称うるシモンを招け、かれは海辺なる皮工シモンの家に宿るなり」と云えり。33われ速かに人を汝に遣したるに、汝の来れるは忝けなし。いま我等はみな、主の汝に命じ給いし凡てのことを聴かんとて、神の前に在り』

そこで皆はペテロの来るのを今や遅しと待っていた。それからペテロの言葉になります。

34ペテロ口を開きて言う、『われ今まことに知る、神は偏ることをせず、35何れの国の人にても神を敬いて義をおこなう者を容れ給うことを。36神はイエス・キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言をおくり給えり。37即ちヨハネの伝えしバプテスマの後、ガリラヤより始まり、ユダヤ全国に弘りし言なるは汝らの知る所なり。

ロマ書2章をみますと、

「9すべて悪をおこなう人には、ユダヤ人を始めギリシヤ人にも患難と苦難とあり。10凡て善をおこなう人には、ユダヤ人を始めギリシヤ人にも光栄と尊貴と平安とあらん。」（ロマ2・9～10）

神さまは一視同仁に見ておられる。この、

「偏り見てはならない」

とはレビ記の中に出ておりますが、預言者も公平と正義を唱え、

「審判は偏ることがあってはいかん」

ということはしばしば伝えている角度です。その準備はもちろんなされていたのですが、それが本当のところには、旧約の時には徹底していなかったのです。

「神は偏ることをせず、何れの国の人にても神を敬いて義をおこなう者を容れ給う」

ですから、事態は万民の事態にきている。だから、

「神はイエス・キリスト（これ万民の主）によりて平和の福音をのべ、イスラエルの子孫に言をおくり給えり」

と。イスラエルをまず潔め別たれたが、その潔め別ちが万民に向かって展開してゆく。潔め別ちということも私してはいかん。

「私は潔め別たれた者」
として自己を私したら、その潔め別ちはパリサイになる。
「私はクリスチャンだが、あれはクリスチャンでない」
と、もし人を見くだすならば、これはユダヤ教的なものと同じパリサイです。
ところで、これは何々教会、また無教会、あるいはカトリックもそうです。カトリックでないものをもし破門するというようなことで、カトリックが
「教会によらなければ救いがない」
というようなことだったら、これは誠におかしなことです。だから塚本先生も、
「教会の外に救いあり」
というような言葉を掲げて、戦わざるを得ないような面があるのもごもっともなわけです。けれどもまた、その無教会が何か、知らない間に枠ができてしまって、
「教会は信仰がちょっとおかしい」
といったようなことをやっておれば、「自分は潔め別たれたもの」として信仰の事態を私しますから、これはダメです。
それでは、どうしたらいいか。私たちは自分の、ある確信をもっていいはずだが、それが全然はずれてしまうというのは一体どういうことかと、外側の論理的な角度からは一応ちょっとそう思われるように見えます。けれども、実存の角度はそんなものじゃない。それは何でもない。その答案はちゃんとペテロが書いていてくれている。

37 即ちヨハネの伝えしバプテスマの後、ガリラヤより始まり、ユダヤ全国に弘りし言なるは汝らの知る所なり。

ヨハネのバプテスマは悔改のバプテスマでしたが、キリストのバプテスマは火と霊をもってするバプテスマです。即ち魂のバプテスマ、御霊のバプテスマです。この御霊のバプテスマというのがすべての潔め別ちを徹底的に例外なしにもたらすところのものです。

●贖罪の十字架

38 これは神が聖霊と能力とを注ぎ給いしナザレのイエスの事にして、彼は徧くめぐりて善き事をおこない、凡て悪魔に制せらるる者を医せり、神これと偕に在したればなり。39 我等はユダヤの地およびエルサレムにて、イエスの行い給いし諸般のことの証人なり、人々は彼を木にかけて殺せり。40 神は之を三日めに甦えらせ、かつ明かに現したまえり。41 然れど凡ての民にはあらで、神の預じめ選び給える証人、即ちイエスの死人の中より甦え給いし後、これと共に飲食せし我らに現し給いしなり。42 イエスは己の生ける者と死にたる者との審判主に、神より定められしを証することと、民どもに宣べ伝うる事とを我らに命じ給う。43 彼につきては預言者たちも皆、おおよそ彼を信ず

る者の、その名によりて罪の赦を得べきことを証す』

このペテロの証言は、伝道、十字架、復活から再臨に至るまでのキリストの事態を述べている。そのすべての事態に対する証人であるというのです。

「人々は彼を木にかけて殺せり」

と書いてある。同じペテロが書いたペテロ前書2章に、

「21**汝らは之がために召されたり、キリストも汝らの為に苦難をうけ、汝らを其の足跡に随わしめんとて模範を遺し給えるなり。22彼は罪を犯さず、その口に虚偽なく、23また罵られて罵らず、苦しめられて脅かさず、正しく審きたもう者に己を委ね、24木の上に懸りて、みずから我らの罪を己が身に負い給えり。これ我らが罪に就きて死に、義に就きて生きん為なり。汝らは彼の傷によりて癒されたり。25なんじら前には羊のごとく迷いたりしが、今は汝らの霊魂の牧者たる監督に帰りたり。」（ペテロ前2・21～25）

「木に懸りて、みずから我らの罪を己が身に負い給えり」

との聖言がこのペテロの使徒行伝10章の言に対する最もよき裏付けであると思います。

「人々は木に懸けて殺したのだけれども、ただ甦った」

と、そういうことではない。木に懸けて殺したという、殺したのは人々だろうけれども、しかしこれは

「自ら我らの罪を己が身に負い給えり」

なのです。

キリストはもちろん木に懸からなくて良かった。彼はいきなり天界に行かれて一向差し支えなかった。エリヤよりも、エノクよりも素晴らしい方ですから、いきなり霊体に化してしまって、変貌の山からいきなりモーセ、エリヤのはるか上の方まで、キリストは昇ってしまって良かった。けれども、あの変貌の山でも使徒たちを置き去りにしてキリストは昇られなかった。彼はしかしもう聖化し、栄化してしまって、もう昇る一歩手前の姿になられた。キリストの変貌は、復活、昇天の徴です。けれども、彼はどうしても受くべきバプテスマ、即ち十字架を通らねばならなかった。それは、

「父よ、汝の聖旨を成し給え」

というこの祈りです。この祈りでキリストはとうとう神さまから、

「お前は罪の贖いのために十字架につけ」

と示されたから、彼は進んでローマの兵隊の前に立った。ユダによって売られた。そして事実、磔刑に処せられた。その相対的な事実としては、キリストは木に懸けられた。しかしながら、もうひとつ奥の現実においては、彼自ら懸かったのです。それは、

「宗教的天才がただ十字架に懸かって死んだ」

ことが贖罪にはなりはしない。もし「宗教的天才が十字架に懸かって死んだ」ということ

が贖罪になるなら、他にいくらでも十字架に懸かった宗教的天才はいますから、それが贖罪になるわけですけれどもそれとは違う。神からの独一の使命を帯びた神の子イエスの十字架というものは、彼自らが神の聖旨を体してのただ一つの贖罪という十字架です。天上天下、東西古今にただ一つの十字架です。この十字架が歴史を二つに分けてしまった。そういう十字架であるということ。彼自らが命を棄てた。木に懸けられたが、しかし彼は木に懸かって自分がこれを引き受けた。そして贖罪の大業を果たし給うた。これがキリストの、

「汝の聖旨を成し給え」

という祈りです。私たちの生活で一番大切なことは

「常に祈る」

ということだと申しましたが、その常に祈る祈りの中心は「汝の聖旨を成し給え」です。

「汝の御意を成してください」

というときには、自分が本当にそこに投げ出されていなければ、こう祈れないわけです。自分の意（こころ）は捨てるんです、

「貴神（あなた）の御意（みこころ）を」

というときには、自分の意は捨てられている。自分の意が捨てられているということは、全存在的に一番激しい行為です。己を捨てるという行為は最も激しい行為です。最も激しい内的行為が、

「汝の聖旨を成し給え。この我において成し給え」

の祈りです。私の心は捨てます。

「わが望みは消えゆくとも」

という讃美歌がありますけれども、「わが望みは消えゆくとも」ではない。

「わが望みは消え失せよ。神さま、あなたの望みを成してください。私の望みなんかすっとばしてください」

です。そのところに、己が本当に投げ出されたところに、さきほども申した「無」があるんです。即ち、「無即無限」の世界がある。「大死即大生」の世界がある。イエスは本当に「汝の聖旨を成し給え」との実存を貫かれた。それをペテロがここで、

「我等はイエスの行い給いしもろもろの業（わざ）の証人である」

と言っています。しかもまた、イエスがそのような祈りにおいて、終（つい）にゲッセマネの祈りを突破し、十字架に懸かり、昇天し、再び来らんとする。これはみな「汝の聖旨を成し給え」の祈りでもって一貫している事実です。そして、

「この我を通して、どうか為してください。この私をどうかお使いください」

と言って己を投げ出している。これほど激しい祈りはない。それは私たちにはなかなかできない。できないから、一生懸命やるのも悪くはない。けれども、私たちに「汝の御意を成し給え」との祈りが本当に祈れるのは、このイエス・キリストが十字架において一切を

なしたところの、「汝の御意」が究極において成ったところの、

「贖罪の十字架」

です。そこに汝の御意が現成した贖罪！　キリストの十字架において現成して、そして十字架において私はすっ飛んでしまったのだから、

「汝の聖旨を成させ給え」

と祈るのに、自分というものはもう無いではないですか。自分がないというのが恩寵ではないですか。

「私はまだ自分がある」

なんて言っていたら、それはキリストの十字架を本当に見ていない。それは謙遜でも何でもない。むしろそれは極端にいうなら傲慢なんです。皆さん一人ひとりはもうふっ飛んでいるじゃないですか。

「私はまだ信仰がダメです。私はまだ何々がダメです」

なんて、何がダメか！　ダメなことは分かりきっています。そのダメな私たちだからこそ、

「お前はもうダメじゃない、私はお前をすっ飛ばしてしまったぞ」

と。原子力よりも力がある、このものすごい原始力がキリストの十字架のすっ飛ばしです。キリストの十字架というこの贖罪の原始の力は、私たちの中に何ものも残っていないという贖罪の本当の完了がきている。だから、

「神さま、あなたの聖旨が成り給え」

との祈りは、キリストの十字架が本当に仰がれ、そこにおいて本当に祈られます。そうすれば、そこで本当に汝の御意は来る。汝の力はくる、汝の生命はくる、復活の生命は来る、御霊は来る。だから、この十字架が今までのようにただ偶像化されて、ただ教会に飾ってある十字架でもダメだし、無教会でただ

「十字架、十字架」

と言っているような十字架でもダメです。私たちがいわゆるカトリック、プロテスタントをなお乗りこえて――カトリック、プロテスタント、無教会にもみな本ものは有りますよ、けれども、そんな相対的なことを言っているのではない――私たちはみなこの原始に帰るべきときが来ている。そして、本当に進むべきときが来ている。使徒たちの現実に入るべき時が来ている。

だから、皆さん、この「汝の聖旨を成し給え」との祈りが諦めでもなければ、傍観でもない。最も激しい祈りです。これは十字架の下で本当に祈られる。これほど力強い祈りはない。これほど私たちに力を与える祈りはない。既に十字架においてすっ飛ばされている私たちですから、

「神さまが成ってください」

とそこから始まって、祈りが本当に祈らざるを得なくなってくるわけです。十字架におい

てすべてのものが潔められている。

「潔い、潔くない」

なんて、旧約聖書の律法において定めてあったものをキリストはすっ飛ばしてしまった。これが新しき革袋に盛らなければならない御霊のキリストという新しき葡萄酒であります。

この新しき葡萄酒は新しき革袋に入れなければならない。イエスがユダヤ教から異端視されたのは実は、律法の奥にあるところの、即ち窒息しかかっているところの律法の、本当の根本精神の福音をキリストは逆に掴んで、律法を突破しながら、律法をぶち破りながら、律法を満たした。律法を満たすどころではない。律法を更に豊かなるものにしている。こういったものがキリストの十字架におけるところの贖罪の潔めです。だから、義認即聖化なのです。神学を言っているのではない。事実を言っている。そのようにして限りなく進められていく。我々の現実は破れの現実だから、限りなく包んでゆく。これでいいなんてところは一つもない。けれども、非常に本当のものが来ている。

「汝ら父の全きが如く全かれ」

という「全さ」はキリストの十字架において来ているではないですか！　どこに不足がありますか！　私たちはこのキリストの十字架の恩寵に対して、何が不足しているか！　芥子種一粒という本当の全さが既に、破れの器を今度はそれ自体全存在的に、

「完全なものにお前たちをするぞ」

と。だから、

「父の全きが如く全かれ」

という絶対不可能の命令をキリストはくだして、

「私が全くしてやるぞ」

というように響いてこなかったならば、決して福音ではない。キリストの言を本当に受けとっていない。キリストの言は、この激しい言の中に、驚くべき祝福と力と生命とが約束され、またその中に入っている。その裏付けは彼自身が最後にやったのです、最後に！

いろいろなことをなし、いろいろなことを仰ったが、その全裏付けを最後に十字架と復活と昇天をもって、聖霊の降臨をもって、してくださった。この聖霊の時代に既に入っている私たちがこの聖書の事態をその角度から受けとらないで、まだ

「教えだ」

なんてやっているうちは、しょうがないです。

これは恩寵です、大歓喜の音信ですよ、皆さん！　ペテロは示された、

「我が潔めしものをなんじなんぞ潔からずとなすか。私は十字架において一切を潔めたではないか」

と。豚でも蛇でも何でもよろしい。みんな一つの世界に入っている。ルーベンスが絵に描いているように、イザヤが預言したように、蝮の穴に小児が手を突っ込んでも咬まれない

という世界は、あの終末の世界はキリストが既にもう現じている。アフリカの映画などで見ると、野獣は弱肉強食で厭なものですよ。地上はみな罪のうちに乱れている。しかしこれは本当に神の世界になる。

シュバイツァーさんがアフリカにおいてとにかく、この悲願をもってやっておられる。この間もたまらなくなって世界の政治家に向かって叫んだ。それはキリストの恩寵によってすべてが潔められて在る。問題はそれを受けとるかどうか、ただそれだけです。心の扉を本当に開いて、十字架に豁然として眼が開かれるか。眼から鱗の如きものが落ちるか。本当に十字架の前に皆さんが一遍つぶれるか。聖書は本当にとにかく一遍ぶっ倒れなければ読めて来ないのです。

研究はいくらでもやってごらんなさい。研究で聖書が掴めたというのなら、私はその例を知りたい。研究ではない。どうも「聖書研究会」というのがそこらにたくさんあって困る。名前は「研究会」でも何でもいいですけれども、「聖書身読会」をひとつ新しくやってくださいよ。知らない間に名前に囚われますよ、研究会なんていっていると。私はだいぶん今夜は口が悪いようですがね。どうか、一切がすっ飛ばされた、このペテロの証言の事態を新しく受けとって、

「私たちは何と素晴らしい恩寵の世界にいるか。然らば、この証人となろう」

と。クリスチャンは証人の他の何ものでもない。聖書研究家はダメ、聖書註解者もダメ。私たちは全存在をもって証する。

「汝らは証人となれ」

とある。汝らは聖書研究家になれとか、註解者になれとか、どこに書いてあるか。註解も研究も悪くはないですよ、いい角度から大いにやったらいい。けれども、根本は、私たち誰でもが無条件にできるものは、即ち実存をもって、生活をもってこのキリストを証することであります。事実、私たちの間にその証がこぼれています。これはペテロ、パウロと同じように、ナザレのイエス・キリストの御霊がなし給う事実です。私はとにかく無教会に育って何十年かいたけれども、ひとつもそういう現象を見なかった。

しかし、この突き抜けのところに来たらば、私たちを通してもう数えることのできないほどにいろいろな事が起きている。事実に証明される。私はいくら線を引かれてもいい。皆から、

「小池はおかしなやつだ」

と退けられてもいい。けれども、私はこのペテロ、パウロと限りなく同質の世界を行きたい。皆さんも本当にそう思うでしょ。そうしたらば、いわゆる無教会的な「真実」とかいうことではない。キリストに在って御霊が一つであるならば、これは何人が離すことができるか。イエス・キリストの御霊の愛から離すものがあるなら離してみよと。本当のコイノニア、本当のエクレシアというものは、この世の如何なるものをもってしても断ち切ることのできない本当の生命体です。そういったところに本当の真実がある。交わりがある。相手が

どんなに滑っても、転んでも、躓いても、信じ抜くことができる。耐え抜くことができる。それは本当に御霊の愛です。石に打たれても、

「彼らを赦し給え」

と言って愛したステパノの愛が、祈りがパウロの回心の導火線になっています。何といっても、ステパノはイエス・キリストの最初の殉教者としての驚くべき証人として立った。

「彼らは聖霊に逆らう」

と言って叫んだ。どうか皆さん、そのようにキリストに在って真に勇敢なクリスチャンに成ってください。勇敢とは人間的な英雄のことを言っているのではない。このキリストの御霊が生きてくるならば、

「千万人といえども我行かん」

とは決して大言壮語ではなくなってくる。それが乙女であろうと、おばあさんであろうと、皆そうです。どうか、この20世紀の後半の、特に日本の精神状態はもう福音の他に救いはない。病膏肓（こうもう）に入っている。

それはあなた方が療養所にいらっしゃって聖書を学び、常に祈る現実に置かれ、偉大なる使命をもって、今この時を一日一日を送っていらっしゃる。どうか、特権であり、使命であり、恩寵であることを深く自覚されて、体が少し弱いぐらいのことをどうか決してひけなんかおとりにならず、

「ここにキリストの恩寵がきている」

と、このペテロの言を本当に我が言として、証人として立っていただきたいと思います。

●復活

40 **神は之を三日めに甦（よみが）えらせ、かつ明かに現したまえり。**41 **然れど凡ての民にはあらで、神の預（あらか）じめ選び給える証人、即ちイエスの死人の中より甦えり給いし後、これと共に飲食せし我らに現し給いしなり。**

福音書の終りの方を見てみると、復活のキリストは現れてきて、戸が閉まっている所に入って来られ、

「魚があるなら食べるぞ」

と言われた。これは驚くべき事実、これをペテロは証言しています、はっきり。今の神学者や牧師さんがこれを本当になかなか受けとらない。聖書の現実は私たちがこれを目で読んでいて済むような現実でない。これは本当に祈りぬいて、これをつかまえなければできないような驚くべき現実であります。どうか、そういう深刻な驚くべき分厚な、次元の高い現実ですから、そういう意味で聖書は本当に端座して、祈って読むべき、またその現実の前に投身し平伏して読むべき書であります。魂が平伏さなければ聖書は読めない。

そういうクリスチャンを神さまは要求している。それは偉そうなところにはない。世に

棄てられたような、顧みられないような小さな集まりや、教会や、そういうところに今、神さまは語りかかっておられる。

私はこの日曜日に横浜のフィラデルフィア教会に行って、お話をしました。北欧系統のアメリカ人です。実にこの御霊の世界に魂を置いている御夫妻です。いろんな教会の人々ともお交わりしますけれども、どうしても頭のクリスチャンが多いといって嘆いておられます。だから、私みたいのが、何のご縁か知りませんが、非常に肝胆相照らすわけです。しかし、そういった所に本当によき証をもっている会員がおります。脳膜炎とカリエスで、もうどうにもならない夫のために、本当に平伏して祈った。そうしたら、癒されてしまったという。その人は私が話をして祈りかかったら、霊界の驚くべきハレルヤの世界に入った。素晴らしい人がいるなぁと思ったら、やはりそういう体験をもった婦人でした。

誠にキリストの御霊が皆さん一人ひとりに、それぞれのっぴきならない道をもって、賜物をもって豊かに恵もうとしていらっしゃる。どうか、ブレーキをかけてはいかん。信仰の世界は揣摩憶測（しまおくそく）［自分だけの判断で物事の状態や他人の心中などを推量すること。当て推量］したり疑ったりするくらい、信仰の世界を破壊するものはありません。自分の側がマイナスであっても、どんなにぺっちゃんこであっても、運命の波風が立っても、それらを通してキリストという船は波をけって進んでいく。大丈夫といって前進してくださる。キリストという飛行機はぐんぐん上昇していく。これがキリストの御霊の恩寵です。

私たちは弱いときに本当に強い。弱きに徹する。本当に弱さを自覚するとき、その中にキリストは入って来られるのです。皆さん、聖書を読んでそこでたどりつくことは、イエス・キリストの事態です。何ものにも代えることができない事態です。捨身の祈りになっていけば、あなた方が病の癒える祈りをなさっても、どうぞ遠慮なくなさってください。御利益ではないのだから。

「どうか、貴神（あなた）のものとして、使命があるなら、私を健やかにしてお使いください」

と本当に祈ってください。

「どのくらいになったら癒えるか」

などと、そんなことを揣摩憶測（しまおくそく）してはいかん。そこでもっともっと大胆に棄身の祈りをしなくてはいかんと思う。

「人には能わねど、神は一切の事を為し給う」

と書いてあるではないですか。

「すべての不義とすべての病を医（いや）す」

と書いてある。それは根源事実として展開してゆく。計算したらダメですよ。計算なんかいらん。キリストは波状攻撃するような祈りを時々、福音書の中で要求しておられる。

「求めよ、さらば与えられん」

とは何ですか。

「キリストの生命を求めよ」

ということ。さらば与えられるのです。自分の側の幸福、安寧を求めたってダメです。

「キリストの生命、貴神（あなた）の生命、貴神の力を求めます」

と。キリストを求めるんです。癒しとは何か。キリストの力を求める。このキリストを求めているのが即ち、

「求めよ！」

で、自分の側の何かを求めているのではない。

「自分の側の何かを少し整えよう」

なんて求めているのではない。イエス・キリストを求める。さらば与えられる。

「**善きものを賜（たまわ）らざらんや**」

という。聖霊を賜（たま）い給う。

「**叩けよ、さらば開かれん**」

地獄の門が開かれるのではない。天国の門が開かれる。そうして私たちが天国体にされ、

「**汝自身が善きサマリヤ人となれ**」

と言う。隣人（となりびと）とは誰かといえば、誰が隣人となったかといえば、

「お前自身が天国体となれ、お前自身が隣人となれ」

と。問題はいつも神から直接にきて――自分において、この我においてですよ――キリストの事態が展開し、神の事態が展開する、この一点にかかっている。

「**汝の上に教会を建てる**」

と。皆さんの上に建てるとキリストは言っておられる。一人ひとりの上に幕屋が建ってゆく。皆あなた方一人ひとりが独立の幕屋になる。そして大きなコイノニアとして、キリストの幕屋であります。

人間の側の何か妙ちきりんな、私していたものがみなダメになる。全部棄ててゆく。これは有れども既に無し。無けれども一切を有（も）つという世界です。これはキリストにおいて有る。そういった魂の突き抜けの自由の中にこのイエス・キリストを有って入るのでなかったら、信仰はつまらんですよ。止めた方がいい。

そこでペテロは、この復活のキリストが入ってきて、そして飲食を一緒にしてくださった。噫、なんと驚くべきキリストであるか。本当に彼は幽霊ではなかった。霊体を有った復活体である。これで彼らは本当にキリストの福音のために立った。大歓喜のおとずれ、死んでも死なない生命が約束されている。キリストは天界に昇られて、

「私はお前たちを孤児にはしないぞ。今に、私の中に現じていた御霊の事態をお前たちに与えるぞ。助け主を与えるぞ。祈って待っていろ」

と言われた。そうして、弟子たちは祈って待っていた。

これが今、私たちが祈って待っている今度のペンテコステに対してキリストは、

「汝ら祈り待て」

と命じておられる。あなた方は、特にペンテコステに向かって常に祈りを深めていってください。私はこの1月にここで皆さんと集会をもってから今日までに、だいぶんご無沙汰をしましたが、皆さん、よく聖書を読んで祈りましたか。申し上げておきましたね。こんな人間小池なんて者を相手にして、これを相手にして皆さんが集会を待っていらっしゃるなら、私はもう止めます。私は今晩も皆さんと一緒にこのペテロの現実の中に入ろうとして来たんです。皆さんに私は何かお説教をしに来るんじゃない。どうか、そういうわけで、私は殿（しんがり）に往きますから、皆さん、どうかどしどし遠慮なく先に進んでください。

「後（あと）なる者は先に」

と書いてある。私みたいな弱虫は後まわしでいいから、どうか、勇ましく進んでください。私は弟子なんか一人も作らん。

「これは私の弟子だ」

なんて、そんなことは言わん。みなキリストの弟子、みなキリストの僕、私たちはそれぞれかけがえのないキリストの体として、大きな有機体にされてゆくんです。主はキリストのみ。それで行きましょう。

●聖霊降り給う

ペテロはこの証の終りの方で、

43 **彼につきては預言者たちも皆、おおよそ彼を信ずる者の、その名によりて罪の赦（ゆるし）を得べきことを証す』**

即ち木に懸けられたことは、またキリストが自ら木に懸かったことは、罪の赦しである。罪の赦しということは、赦されたということは、

「そうですか、赦されましたか」

じゃない。我という罪が完全に赦されているんですから、もはや我はどこかへ行っちゃっている。そして、新しい我は、キリストにおいて新しく生まれた我です。

「人、新たに生まれずば、天国に入ることができない」

「われキリストと共に十字架につけられたり。もはやわれ生くるに非ず、キリストわが中にありて生き給うなり」

「斯（か）くほど、生命を捨ててまで、我を愛し給うところの者によりて」

と、心からパウロが言っている通り。そのような証言をしつつありましたから、

44 **ペテロ尚（なお）これらの言を語りおる間に、聖霊、御言をきく凡ての者に降（くだ）りたもう。**

皆さん、聖霊が降っていますか。私は信じます。聖霊が降っていると信じます。

45 **ペテロと共に来りし割礼（かつれい）ある信者は、異邦人にも聖霊の賜物（たまもの）のそそがれし**

に驚けり。

どれほどユダヤ人はこの割礼を重んじていたか、一つの定規にしていたかが判る。無教会は、

「洗礼も聖餐も要らない」

なんてやる。しかしながら、洗礼も聖餐も形式ではダメだけれども、しかし聖霊のバプテスマがなくて、

「洗礼は要らない」

なんて言ったってそれはダメですよ。また、この聖餐はキリストが、

「我は生命のパンなり、わが肉を喰らいわが血を飲め」

という聖餐の信仰の事態を本当に受けとらないで、

「聖餐は要らん」

なんて威張ってみても、これはダメです。問題は外側のことでなくて内側のことです。しかし本当に内側の内的な事実が観念でなくて、現象しているのでなかったなら、これは福音ではない。福音をゴマ化していることになる。私たちは御霊のバプテスマと、御霊における最後の晩餐をいただきながら行かなかったならば、どこに生命があるか。

異邦人にも聖霊の賜物のそそがれしに驚けり。46**そは彼らが異言をかたり、神を崇むるを聞きたるに因る。**

私たちはさんざん異言派だとか、神癒派だとか言われてけなされて悪口言われた。私は異言派でも神癒派でも何でもありません。異言だとか神癒だとかを看板にしてはいません。けれども、最近も幾つか神癒的なみ業が現れた。これは仕方がない。神さまの栄光が現れる。その私は証人になっているだけのはなしです。異言ももちろんあなた方の中に語られる。これを何も変に思うことも、ブレーキをかけることもない。ただ

「よろしきにかなって」

ということはいろいろの場合においてもありますから、それは秩序の上から大事なことです。パウロが言っている通りです。

けれども、この神の恵みは我々のなす一切のことの上に現れてくるのですから、学問をしようが、芸術をしようが、事業をしようが、台所で働こうが、何をやっていようが、それを通して神の栄光がそこに現象する。そこにおいて神の証人となる。我々のなすこと、言うことすべて神の証となる。これがクリスチャンじゃないですか。何を人間の側から制限するか。聖書の豊かなる、驚くべき現実に対して、まだ聖書が伝えきれないところの驚くべき神の恩寵の現実に対して、人間の側から

「こうだ、ああだ」

といって、また再びパリサイになり、またユダヤ教に帰ってしまうわけです。ですから、この間も雑誌に書きましたように、聖意霊法の統一の場というものは、この御霊のバプテスマを焦点として展開して行きます。そして一切の事態に対して本当に、

「ああそうだ。そこに神さまの栄光が現れている」と。またその人たちにいろいろの欠陥があろうが、その中に光っているところの大事なものを見て、それを伸ばしてゆくことができる。人を審くのでなくて、本当に人を善きように展開させ、そして助言してゆくことができる。これは御霊の愛の豊かさです。御霊の智慧の豊かさです。これは御霊の事実の本ものになっているのでなくて

「自分の信仰」

なんてやっていたら、必ず審判になる。これは判然としている。

私が行く二人のドイツ人とアメリカ人は全く超教派的なところに気持が立っている。だから、私は本当に魂の握手ができる。こちらからはパリサイも何もぐーっと包んでしまう。

「**凡そこと忍び、凡そこと信じ、凡そこと耐え、凡そこと望んでゆく**」と。望み貫くことができるんです。ただ向こうが切っているだけのはなしです。どうか、

「**イエス・キリストの愛は如何ばかり高く、深く、長く、広いか**」

とパウロが言い、

「**このキリストの愛より我を離れしむる何ものがあるか**」

と、コロサイ書とか、エペソ書とか、ピリピ書、ロマ書あたりで叫んでいるところの事態がもう本当に響いてきます、この御霊の突き抜けのところにきますと。

どうか皆さん、この東療のまた信愛病院のクリスチャンは、つまらない聖書の研究家や、註解者にならず、聖書の証人になってください。神さまは証人を今、必要として居給う。

「我は今、証人が欲しい」

と仰っている。

「汝ら、わが証人となれ！」

と。いくら迫害されようが、けなされようが、何と言われようがいい。ちっとも私は平気です。私は人間的に偉くも何でもない。何もないからです。けれども、このペテロやパウロの証言が、

「然り、アーメン！」

と響いてくれれば、これは皆さんと一緒に今晩もこの力ある喜ばしき世界に入ってゆく。私もまた皆さんと一緒に今晩恵まれた次第であります。

47 **ここにペテロ答えて言う『この人々われらの如く聖霊をうけたれば、誰か水を禁じて其のバプテスマを受くることを拒み得んや』** 48 **遂にイエス・キリストの御名によりてバプテスマを授けられんことを命じたり。ここに彼らペテロに数日とどまらんことを請えり。**

これはもう御霊のバプテスマのはなしです。